ミツバチ科学 26(4):167-170
Honeybee Science (2005)

韓国のトウヨウミツバチ養蜂事情

久志 冨士男

韓国，清州の工業高校で日本語教師をしている友人がいる．韓（カン）さんといい，韓国のトウヨウミツバチはどのような飼われ方をしているのか知りたいので，野生の蜂を飼っている人を見つけてくれるように頼んでいたら，先日見つかったという返事があり，出かけることにした．韓国は隔週週休２日になっており，６月24～25日が休みで，私のために割いてもらうことになったのである．この２日をフルに使うために前日の23日に出かけた．

養蜂家を見つけるまでが大変だったようである．最初は同僚教師たちに尋ねたが，誰も知っている人はおらず，そこで，農村に住んでいる元同僚のキム・キソンさんに頼んで，探し出してもらったとのことであった．その金さんは退職後「帰農運動」に加わっており，全国の仲間に呼びかけてくれたとのことであった．

釜山から清州まで，車窓から植生を観察しながら行ったが，沿線を見る限りでは蜂が生息できる環境とは思えなかった．すべての木が低く細い．照葉樹は全くない．赤松が多い．

翌日昼ごろから韓さんの車で元同僚の金さん宅に向かった．清州から車で北東に１時間ほど走ったところに住んでおられ，その日は２人とも泊めてもらうつもりで出かけた．そこは山岳地帯であった．韓国の中央を山脈が縦断しており，大きな山塊が連なっている．平地とは違って緑が豊かであった．しかしよく見ると外国産の松（韓国語で「落ち葉松」という針葉樹）の人工林が広がっていた．帰国後図鑑で調べてみたら，ヒマラヤスギではないかと思われたが確信はない．今はクリの開花期であちこちに咲き誇っていた．クリの多い土地である．ニセアカシアの木も結構ある．途中，大樹の下に車を止め，近くの小さな公園のトイレに行ったが，韓さんの説明では，村の入り口にはこのような大樹があり，村の守り神として大事にされてきたとのことであった．よく見るとブナの木であった．そのあと大樹がよく目に付くようになり，韓国の原始の森が想像できた．考えてみると，ニセアカシアは外国原産であり，成長が速いので，同じく成長の速いクリとともに，戦後に植えられたものに違いなかった．

図１　細長い韓蜂用重箱式巣箱

韓蜂用重箱式巣箱

道路際の斜面に重箱式巣箱の一群があるのに気づき（図１），車を止めた．向い側に雑貨店があり，そこが持ち主で，安（アン）さんといった．私の重箱式より細く高い．50箱ほどあった．空箱を計測させてもらったが，厚さ25 mmの板で，内寸185×185 mm，高さ90 mmであった．３段ごとに２本平行の針金の桟が取り付けてあった．重箱と同じ90 mmの高さの基台があり，その前面の下端に巣門が刻まれていた．

私は蜂の出入りの良い１つの巣箱を選び，基台の前面を外してみた．蜂が底に接しそうになっていた．基台の底はメッシュになっていた．これは夏の通気のためのようで，冬は板を押し込み閉じてやれるようになっている．

店に戻っていろいろ質問をした．９段も重ねてあるのがあり，理由を尋ねると，昨秋採蜜しないまま今春下に継ぎ足したためとのことであった．採蜜は11月中旬から下旬までの秋だけで，春にすることはないとのこと．１回で何段採るのかという質問には，外から叩いてみて蜜

の貯まっている段まで採るとのこと．私が，今はクリが咲いているので貯まっているはずだ，ニセアカシアの蜜も入っているだろう，日本と違って湿度も高くない，採っていいはずだ，と言うと，今は採らないと繰り返された．

重箱式はいつ頃から使い，その前はどんな巣箱を使っていたかの質問には，自分は20年か30年前からで，その前は丸太を縦に割って，中をくり抜き再び合わせていたとの返事であった．重箱式に変えたのは採蜜が容易で，作るのも簡単だからとのこと．どうやら，巣箱が細いのは細い丸太時代の名残のような気がした．細長い巣箱は保温に不利なので，ここのように冬が寒いところには適さないのでないのか，と問うと，そんなことは考えたことはない，とのことであった．1か所に50箱も置いてあるが，過密ではないのかという質問には，確かにそう思うので，別のところでも増やしたいが，適地がないとのことであった．

韓国のトウヨウミツバチを韓国では「韓蜂（ハンボン）」と呼んでいるのが面白かった．中国では中蜂と呼ぶのであろうか．見たところワバチと変わるところはない．DNAがワバチと1か所違うとのことであるが，生態的にはどこに違いが出るのであろうか．

私が見た限りでは，樹木の種類が九州とは赤松以外ほとんど共通点はない．むしろ関東以北と共通するようである．照葉樹はまったくないのではないだろうか．種類も少ないようである．しかし草類は九州とほとんど同じであろう．九州にない草を探したが見つからなかった．

いま韓国ではオオキンケイギクが道路際に咲き誇っていた（図2）．北米原産の帰化植物である．著者が住む長崎県の観光地ハウステンボスの裏にある釜墓地へ，戦後フィリピンの戦場などから5千体以上の遺体とともにこの種子が運ばれてきたと言われている．釜墓地の周りで咲き始め，地元の人には「兵隊花」と呼ばれていた．それが現在，全国に，離島の隅々まで行き渡っている．韓国にも同様に渡ったのであろう．

ところが韓国にはセイタカアワダチソウがない．数年前この花の咲くとき訪韓したことがあるがまったく見当たらなかった．戦後アメリカから日本に上陸したのに，なぜ韓国には上陸しなかったのか？　そしてなぜオオキンケイギクだけは上陸したのか？　もしセイタカアワダチソウが韓国に広がっていたなら，韓国の養蜂はもっと栄えていたであろう．

金（キム）さん宅は谷間の清流の側にあった．清流には小さなヤマメが泳いでいた．丸太を重ね内と外から泥を厚く塗った壁のログハウスは金さん夫妻の自作とのことであった．

韓蜂養蜂家と交流

翌日，朝から金さんの車で韓蜂養蜂家の所に向かった．山脈の中の高速道路を忠清北道から慶尚北道に入り南下した．途中，俗離山（ソクリサン）の頂が見えるところを走った．2時間半走ったところで亀尾（クミ）市に入り，そこから携帯電話で相手方の南（ナム）さんと道順の連絡を取りながら山道を登ってたどりついた．

まず，韓蜂を300群持っているという南さんの言葉に驚かされた．私は150群，2倍である．庭には100個ほどの甕が並べてあった．

家の中に入り，挨拶の後，巣板付きの蜜を出されたが，粘り具合で糖度82度程度と思われた．昨秋採取したものとのこと．

私（以下，久）は次々に質問をした．

久：採蜜の時期はいつか？　春にはしないのか？

南：11月中旬から下旬．春は採蜜しない．

久：重箱式以外の巣箱は使ったことがあるか？

南：私はない．父の時代には使っていた．蜂洞であった．

久：その蜂洞の残骸はお持ちでないか？

図2　道端に繁茂するオオキンケイギク

図3　亀尾市郊外の南さんの蜂場
150個の細長い重箱式巣箱にはトタン製円錐形の帽子を載せ，肥料袋をかぶせ，バイクの古タイヤを載せてある．

南：ない．
久：円錐形の泥製巣箱を見たことはないか？
南：ない．
久：いつごろから重箱式に変えたのか？
南：（しばらく考えて）35年前である．
久：なぜ変えたのか？
南：採蜜に便利だから．
久：（出された巣板蜜を見ながら）どのようなところに保存しているのか？
南：常温の部屋の中．
久：スムシが侵食しないか？
南：しない．
久：そんなはずはない．私は最初の3日間は冷蔵庫に入れてスムシを殺す．
南：そんなことしたことはない．（しばらく考えて）ここは11月に冷えるので，スムシは巣箱から出したら死ぬ．
久：蜜の分離はしないのか？
南：ハチミツの半分は他の製品の原料にする．庭の壷の中身は特製の蜜入り味噌や醤油である．残り半分のハチミツの3割を分離し，7割は巣板のままである．
久：よろしかったら，この巣板付きの蜜の値段を教えていただけないか？
南：1 kgあたり20万ウォンである（日本円で約2万5千円．容量で換算すると蜜は比重が高いので1Lあたり3万5千円になる）．これは薬である．巣板にプロポリスが含まれている（注：それはまだ学会では確定されていない）．
久：販路は確立しているのか？
南：農業振興会やデパートと特約している．デパートは卸値を叩かれるので出したくない．個人的なお得意さんも多い（私たちがいる間にも一組の夫婦がやって来た）．

今度は私が質問される番である．

南：オオスズメバチ対策はどうしているか？
久：私が発明した防止器を使っている．100%防止できる．特許権は確定しているが，公開しているので自由に自作してもらって結構である．
南：100%防止できるなどとは信用できない．
久：作り方を教えるので試してみたらよい（私は紙と鉛筆をもらい，階段式の防止器の斜視図を描いて渡した）．後で電子メールで写真を送る．
南：私はペットボトルにジュースを入れてトラップにしている．入ったら出られない．
久：しかしそれを取り付けてもミツバチは護れないはずだ．かえってスズメバチを呼び寄せ攻撃の危険を増す．
南：あなたの蜜はどのように売っているか？
久：宣伝しないので誰も買いに来ない．少数のお得意さんだけに売っている．1 kgあたり1万円である．
南：私に卸してもらえたら，3倍の値段で売れるだろうに．（笑い）

私たちは外に出て，蜂場に向かった．自宅から少し上った所にあった．驚いたことに，ここに150個の巣箱が並んでいた（図3）．近づいてよく調べると屋根としてトタンで作った円錐形の帽子を乗せ，肥料袋を被せ，バイクの古タイヤを乗せてあった．安さんのものと屋根の部分を除くとサイズも構造もまったく同じであった．お互いは直線で120 kmほど離れているのである．残りの150個も近くに置いているとのことであった．1か所に300個も置いたら絶対過密になると思われるのであるが，実際に置いてあるのだから何とも言いようがない．周りを見たがクリの花が咲き乱れるほど繁殖しているわけではない．何とも理解できない．

南さん宅の隣には，教室兼宿泊所が建てられ

てあった．都市の中学生などが，自然環境の宿泊研修に来るのだそうである．

環境問題とミツバチ

帰りの車の中で韓国の環境問題についての話になった．金さんの奥さんは気管支が弱く，咳き込んでいたが，今のところに移ってから治った．田舎生活を選んだのは奥さんのためでもあった．都市部では車のガラスは3日で曇りガラスになる．平地の植生が貧弱なのは朝鮮戦争の後遺症である．食料不足から農地開発が進み，残った樹木はオンドルの燃料になり，結局徹底的に切られた．山岳地帯だけに樹木は残った．そのあと植樹運動を起こし，政府は樹木を護る対策を取っているが，一方で開発も促進しており，植物の回復が進まない．

それに農薬の被害もひどい．韓国にはツバメは1羽もいない．ツバメは，農薬を浴びて飛び上がった昆虫を食べて死滅したようだ．昔話にツバメはよく出てくるが，今の子供はそれを見たことがない．1980年代に絶滅したようである．そのようなことを聞いた．

水田の側を走るとき窓から農薬の臭いが飛び込んでくるときがあった．ツバメがいないので害虫はその分多く発生する．それでさらに多量の農薬を使う．もはやこの悪循環から抜け出すことはできなくなっているようであった．

私はついでだからセイヨウミツバチの状況も知りたいと思い，金さんにお願いすると，知っている人がいるとのことで，次の日そこに連れて行ってもらった．そこで私たちは衝撃的な事実を目の当たりにするのである．

図4　蜜源の少なさと農薬の被害に苦しむセイヨウミツバチ．巣箱の前に大量の死骸が散乱している．

その家の手前の広場にラ式の巣箱が30ばかり置かれてあった（図4）．主人の朴さんに挨拶を済ますと直ぐに蜂場に入ってみた．巣箱の前にはミツバチの死骸が散らばっていた．しゃがんでよく見ると這い回っているのもいる．「これはどうしたのですか」と尋ねると，「農薬」とのこと．隣は水田で，その横は朝鮮人参の畑で，その向こうは唐辛子の畑であった．「どの作物の畑も農薬を散布する，韓国の朝鮮人参は買ってはダメです」と朴さんは言う．朴さんは這い回る洋蜂の1匹を摘み上げ，手のひらに乗せると悲しい顔をしてジッと見つめた．

私が「山の方に土地を借りて移したらどうですか」と問うと，「山に持って行ったらスズメバチにやられる．自宅から離れた蜂場に張り付いている訳にはいかない．それに給餌ができない」との答え．見ると各巣箱には細いビニールのパイプが入っていて1か所のタンクから電動ポンプで砂糖水が送られる仕組みになっている．「花蜜がないので給餌をしないと飢え死にする．山に置いて，そこまで行って，いちいち蓋をあけ給餌をする時間はない．私には別に仕事がある．蜂だけでは生活できない．今年はまだほとんど採蜜できていない．ずっと気温が低く蜜を貯めない．頼りのニセアカシアはなぜか葉を虫に食べられたり，丸く丸められたりして黄色くなってしまった．花が咲くどころではなかった．そこに農薬の追い討ちだ．今，クリが咲いているが，今から蜂数を回復するには手遅れである．韓国の養蜂は消滅する．」

2人が私に言った．「韓国の環境破壊がこんなにひどいとは思っていなかった．ツバメの次にはミツバチが絶滅しようとしている．いつか人間の番が来るのではないか．あなたのお陰で現状を知ることができた．」

朴さんの自宅に招き入れてもらい，ハチミツをご馳走になった．1Lほどのビンに入っていた．「今年採れたのはこれだけです」とのことであった．

（〒857-0103　佐世保市原分町55）